野上弥生子の肖像　児童文学との関わり

宮澤　健太郎

はじめに

小説「海神丸」や「狐」などで知られるこの作家が児童文学の世界に足を踏み入れるに至った経過や理由などを解き明かしてみたい。そして弥生子の児童文学が目指したものが何であったかを解明するのが本稿の目的である。

野上弥生子とは

一八八五年（明治18）大分県臼杵町で生まれた。父は酒造家小手川角三郎。弥生子の本名、ヤヱ。はじめは八重子の名を用い、後に弥生子と称した。小学校の頃、国文学者、久保千尋から古典の指導を受ける。16歳で上京、巌本善治のキリスト教系の明治女学校に入学、18歳の時、同郷の野上豊一郎と相知り、同時に理科大学大学院の寺田寅彦を知る。この頃、漱石がイギリスから帰り一高の英文科の講師になると豊一郎は漱石に惚れ込み一高の英文科に入った。明治39年、22歳の弥生子は豊一朗と結婚。漱石の手ほどきで「縁」を書いた。漱石の影響を受けて写生文を駆使して

小説を書いた。『ホトトギス』や女性誌『青鞜』などでも活躍（明治43～大正7）。三人の男児の母となり、初期の作風から子どもに焦点を当てた作品が多くなった。戯曲も幾つか書いた。そのうち社会性にも興味を抱き、青年の魂の情熱を描いた。「真知子」（昭和3～5）など女の生き方も描いた。晩年には「秀吉と利休」（昭和37～38）など批評めいた歴史分野も開拓した。

児童文学としての作品

夏目漱石が「我輩は猫である」を俳句雑誌『ホトトギス』に載せたのが一九〇五年（明治38）1月のことである。その後続編を2月（二）、4月（三）、6月（四）、7月（五）、10月（六）、次の年1月（七、八）、3月（九）、4月（十）、8月（十一）と続け大倉・服部書店から「我輩ハ猫デアル」、明治38年10月、同中編が同39年11月、同下編が同40年5月に刊行。一冊本としては明治44年7月大倉書店から出された。

この「我輩は猫である」が出た頃から弥生子は児童文学を書き始めた。

これは夫、豊一郎ともども漱石山房に出入り始めた頃である。この会は後に木曜会という名で呼ばれ、多くのインテリが敷居をまたいだ。もっとも古い弟子は俳人、松根東洋城（松山中学教え子）、寺田寅彦（五高の教え子）、そのあとは野上豊一郎、弥生子、森田草平、鈴木三重吉、赤城桁平、中勘助、安倍能成、安部次郎、和辻哲郎、内田百閒、小宮豊隆などが加わり、最後に芥川龍之介、久米正雄らが集う会であった。この会は明治41年10月から木曜会として漱石の死まで続いたという。漱石死後は名前も九日会と変わった。命日が12月9日だったからだ。ここで弥生子は夫ともども漱石の教えを仰いだのであった。漱石のこの頃のモットーは写生である。俳句の面では正岡子規、高浜虚子

らが主張した自然主義の実践の場でもあった。この木曜会から漱石の推奨もあって新しいスタイルの作家が、つぎつぎ育っていったのは興味深い。弥生子も当然その一人だ。それは漱石が学者から朝日新聞の文芸欄の担当になったこととも無縁ではあるまい。こうした木曜会での成果が弥生子の作品に如実に表われているとみてもよいだろう。

弥生子の児童文学の四つの変遷

① 弥生子は明治44年頃から大正5年にかけては、可愛そうな身よりのない少女の話をよく書いた。「桃咲く郷」（明治44『少女の友』）、「菊子の話」（大正元『少女画報』）、「雛子」（大正5『少女画報』）などである。

「桃咲く郷」……十三歳のお新は田舎の豆腐屋の店先に捨て子にされた少女だった。朝は真っ暗いうちに起こされ手伝わされ、それが終わると赤ん坊を背負って子守の日々。その赤ん坊の名は銀坊。銀坊はお新が大好き。ある日、あまりの辛さに銀坊を連れてこの村を出て行く。とある理想郷、大和村という村で優しい娘たちや親切な爺さん婆さんに御馳走になり、うつらうつらしていると、突然、豆腐屋に起され今迄のことが、すべて夢だったことを知る。

「菊子の話」……小石川、場末の裏町の二間ばかりの借家に、住んでいるのは九歳の菊子とその母。父は二人を置いて満州に行ってしまっていた。（お祖父様はしかし大変お金持ちだったが亡くなってから父がそれを使ってしまって貧しい生活に甘んじていた。）お祖父様の付けてくれた菊子という名前の由来になった菊の秋の11月5日。お祖父様のお墓参りを兼ねて染井の墓地、板橋の庚申塚あたりの小高い丘あたりで、二人でお弁当を食べふと見ると、そこのお祖父様も好きだった菊花壇のある家を見つける。そこに無断で入ってみると、一人のおじいさんが剪定しているの

に気付く。話してみると、それこそ大町の叔父様だった。その日から二人とも、ここに移って幸せに暮らすことになった。お伽小説との角書がついている。

「雛子」……士族だったお父様と、お母様が好き合っている時に雛子は生まれたが、わけあって、お父様は別の人と結婚されお母様も再び結婚することになり、雛子は伯父さん伯母さんのところに里子に出された。その雛子について実のお母様は里子（実は雛子）は、急病で死んだと言われていた。それから十幾年が過ぎて雛子も16、7歳。お母様も子どもが生まれず、貰い子をして今13歳になる義太郎という男の子がいるという。この母子の手紙のやりとりが復活して愈々会えることになるというややこしい話。少女小説との角書がある。

② 大正8年頃から『赤い鳥』に説話・頓智系話を書くようになった。『赤い鳥』の教育性に考慮しての意図と考えられる。「一本足の鶴」（大正8『赤い鳥』）、「兄弟の百姓」（大正8『赤い鳥』）、「人間はどれだけの土地がいるか」（昭和11『婦人公論』）などがあげられる。

「一本足の鶴」……殿様の屋敷の料理番は大層頓智があった。王様から鶴を使ったご馳走を作れとの命令が出た。料理が出来上がる頃、園丁のところの娘が鶴の足を一本くれと言われ、あげてしまう。出来上がった片足のない鶴の料理を見て怒った王様は料理番をつれて狩り場にいって一本足で立つ鶴を矢でうつと鶴はもう片足も出した。それみろと王様。料理番慌てず昨夜も矢の音を聞かせたら鶴もきっと二本足が出たでしょうといって王様を笑わせた。これはジョヴァンニ・ボッカチオの「デカメロン」のなかのコントの一つだともことわっている。

「兄弟の百姓」……隣り合って田を耕す兄弟の百姓がいた。おいしい米をつくっていたがある時、兄がこのお米でうまい酒を作れば儲かると言って商売を始めた。商売はうまくいったが、この男の息子の放蕩息子がお金をもって逃げてしまった。途方に暮れた兄は商売をやめてしまった。弟に泣きつくと、「米はやはり米で食べるのがいいのだ。」と言う結論になった。

「人間はどれだけの土地がいるか」……トルストイの翻訳。姉妹のうち妹の夫パホームは隣の土地を買った。「土地さへ自由になれば悪魔だって恐くない」といったものだから、悪魔はこの男と勝負しようと決めたのだ。畑のまわりの百姓たちとのトラブル続きのパホームはもっと別の広い土地がほしくなった。一方でバシキールの村では一日で歩けた分の土地をあげましょうということだった。この企画にのって出来るだけ広い所を取ろうと、パホームは一日中歩き回って疲労し、とうとう最後にたどり着いた丘の上で死んでしまうという寓話だ。よくばってはいけないという教訓でもあった。

③　弥生子童話で本格童話とよんでいいものが大正10年から11年にかけて書かれた。それは「ある泥坊の話」（大正10『東京朝日新聞』）、「神様と巨人」（大正11『女性日本人』）などである。

「ある泥坊の話」……泥坊一家のなかのひとりの若い泥坊は知恵もあるし勇気もあり、強く、美しい顔をもっていた。取れないものもないそんな泥坊だった。ある時金持ちのお城の様な家の、その中に一つの塔があって、覗いた泥坊は真っ青な顔で立ちすくんだ。そこには鏡の前で燭台をもって立つ美しい娘がいたのだ。娘はここに現れた若い泥坊の

妻になることを心に決めていた。この少女に心を奪われたその時から今迄奪ったすべての宝を貧しい人々に与え、森に帰って来る途中でもすべてのものを与えてしまった。そうこうするうち少女は大理石の女神と変わり、後を追って泥坊も石となった。それから何年かして森を開拓した金持ちが森の土の中に男女の大理石の彫像、それは手をとりあって微笑する像、を堀りあて博物館にそれを寄付したという。いかにも幻想的な話だ。

「神様と巨人」……西の国の巨人は大きな体と力で王様を殺し、皆が越えられぬと言う神様をまで倒そうと旅に出る。最後に神、実は谷間に移る自分の影を神とまちがえ、それに飛びかかって剣で影の胸を刺し通したと思った途端、それは自分身身の胸を突き刺していたのだった。

ふたつの話のうち前者は幻想的でロマンチックだし、後者は教訓的だ。

④　伝記ものは昭和9年から11年にかけて執筆したものが多い。たとえば「花のゑのぐ」（昭和9『婦人之友』）、「金時計」（昭和9『婦人之友』）、「竪琴の一曲」（昭和9『婦人之友』）などがある。いずれも発表雑誌の求めに応ずる偉人伝となっている。

「花のゑのぐ」……原題「カドアの少年」。イタリアのとある町カドアに住むティチアーノ少年と姉のカタリーナ。この少年、いつかはヴェネチアにいって画の先生について画家になりたいという意思をもっていた。ある時、丘の上の石の家でまわりに咲いている生花の色をつかって画を描きたいというティチアーノの願い通り、カタリーナの摘ん

だ花で見事な聖母とキリストの画を描いた。それこそ後の天才画家ティチアーノの出発点だった。

「金時計」……原題「幼きショパン」。ある有名詩人ニームゼヴィッチは9歳のフレデリック・ショパンのところを訪ね、音楽会を開きたいから演奏してくれないか、という話をもっていったのだった。演奏会の前は馬鹿にしていた貴族たちも、いざそのピアノを聴いてみるとその腕前にびっくり。コンスタンティーヌ大公さえも大賞賛。ある時、聞きたかった歌姫タカラーニの歌を聴いたフレデリックは大感動。逆に、その歌姫からピアノを弾いてくれないかと頼まれた。そのお礼に金時計を送られた。彼のピアノこそタカラーニの与えてくれた歌の幻想世界の夢をそのまま表したものだったということだ。

「竪琴の一曲」……原題「うまつづらの花束」。モツアルトが7歳の頃、お父さんは世渡りがまずく、いつも貧乏だった。ほうぼうの国を演奏旅行して歩いていた。一緒に行ったのは五つ違いの姉のマリア。心優しい弟は姉のために、演奏会でお金が入ったら姉の為に着物を買ってくれるようにお父さんにお願いした。しかし竪琴の関税が高いので無理だと言ったお父さんの言葉に一計を案じたモツアルトは役人の前で竪琴を神秘的な力でかき鳴らし演奏がみごとに終わると役人は感心して、竪琴の税金はとらなかった。そのため姉の着物を買うことができたという。

「愛子叢書」との関係

弥生子の児童文学と称される作品は、以上にあげたように教訓性が高い。それは自家用性の強いことにもよるが、時代の要請といってもよかっただろう。「愛子叢書」（大正2～大正3）がもっていた次のいくつかの性格にもよるところがあるであろう。

① よい文学を児童に与えんとすること。
② 少年少女へのおくりもの。
③ 本格童話隆盛の前兆。
④ 出版社の記念事業。
⑤ 児童文学界への新機軸の導入。
⑥ マンネリ化の打破。
⑦ 創作童話への意志。
⑧ 児童文学の芸術性。
⑨ 既成文壇人による協力。
⑩ 新人の発掘。

「愛子叢書」は、こういったいくつかの目的をもって起こってきた児童文学運動の出発であったが、軌道にのるまでには、やはり相当の時間がかかった。

前号の与謝野晶子の作品でも見たように、やはり有名な歌人であろうとも稚拙な構成でしかなかった作品も多い。弥生子の場合も、説話に頼り切ったり、頓知話を活用したりの努力の連続であったようだ。

とくに明治時代の求めていたのは冒険、立身出世、仁義礼智であり、それが次第に大正デモクラシーの展開に伴い、個性とか自我の芽生え、自由を主張するようになったのだが「自家用性の強い最善最良の」読み物として出版されようとしたのがまさに、「愛子叢書」の目的であった。そしてはじめの目論見としては森鴎外、島崎藤村、高浜虚子、

徳田秋声、島村抱月、田山花袋、夏目漱石の著名な面々が担当することになっていたが、ここから漱石と鴎外、抱月、虚子が抜けて残る三名と与謝野晶子と野上弥生子の五人による五作品が出版されたのだった。児童文学作品としてみたとき、しかし、全体的には幼稚で単純で到底「文学」の域に達したとは言いがたいものが多かった。当時の弥生子にとってもまさにその通りであった。

おわりに——弥生子の児童文学の特徴

弥生子自身の言葉で言えば、和菓子あり洋菓子あり、幼児向けあり、少年少女向けなどのように種々雑多あらゆるジャンルをもった作家でそれだけ多くの素養を擁した作家であろう。漱石の木曜会から得たものは児童文学に限って言えば、実に写生ばかりではなく弥生子の作物の引き出しはある意味で、漱石より広いのではなかったか。一般的には教訓的なという匂いもたしかに強いが、これも『赤い鳥』などの影響も強いのだろうし、キリスト教的知識、英文学、ロシア文学からの影響も大きかったのではなかったろうか。